

特異的分布を示す皮膚病

編集担当 久保 亮治

皮疹をみて臨床診断に至るプロセスにおいてわれわれ皮膚科医は、皮疹の性状だけでなく皮疹の分布から、さまざまな情報を読み取り、鑑別診断をあげては否定するという作業を繰り返す。さまざまな感染症、炎症性疾患、膠原病、悪性腫瘍、母斑などが、それぞれに特徴的な分布様式を示し、診断を絞り込んでいく過程で、その分布が大きな助けとなる。本号では、そのような特徴的な分布や分布パターンを示す疾患を取り上げた。特徴的な分布、分布パターンには必ずその理由があるはずであるが、その多くは未解明であり、興味深い研究対象でもある。

「総説」では、近年パターン形成の仕組みが解き明かされつつある、多発する復帰変異により生じる“花吹雪模様”を取り上げた。また「統計」と「臨床例」では強皮症/片側萎縮症における特徴的な(しかしまだ分子メカニズムがよくわかっていない)病変分布パターンを取り上げた。また、皮膚疾患の症状発現にはしばしば擦過刺激が関与する。しかしたとえば腋窩の皮疹は、単純に擦過によるKöbner現象と決めつけて鑑別診断を進めると痛い目を見ることがある。腋窩の皮膚は、細菌叢がほかの部位の皮膚とは大きく違ううえに、アポクリン腺が分布するなど、皮膚構造にも違いがある。病態メカニズムを考え、なぜその皮疹が腋窩にあるのか、理由を突き詰めていけば、診断に至るとともに治療へのヒントも得ることができるだろう。そんな腋窩の皮疹を取り上げるとともに、外的刺激と内的な変化の組み合わせで生じる開口部の皮疹、そして局在する仕組みがわからない沈着性疾患を取り上げた。また、母斑の分布には、病変部のケラチノサイトが病的バリエーションをもつ場合に生じるBlaschko線パターン、メラノサイトが病的バリエーションをもつ場合に生じるチェッカーボードパターンや斑状パターンなど、さまざまな特徴的なパターンがある。本格的に取り上げるとそれだけで1冊になってしまうが、今回はその一部を紹介した。さらに、リンパ管走行パターンの関与(リンパ流の逆流)が考えられる悪性腫瘍の皮膚転移パターンを取り上げた。

特徴的な分布の背景に存在するさまざまなメカニズムを学ぶことで、本特集が診断力を磨いていただく一助となれば幸いである。